

県道六条—野洲線工事に伴う
関連遺跡発掘調査報告書 I
— 北東遺跡 —



1983

滋賀県教育委員会
財団 滋賀県文化財保護協会

県道六条—野洲線工事に伴う
関連遺跡発掘調査報告書 I

——北東遺跡——

1983

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

古代における野洲町は近江の歴史上重要な拠点であります。その野洲町の歴史も近年の埋蔵文化財調査によって徐々に明らかになりつつあります。

このたびも県道野洲～中主線道路建設に伴い、用地買収が完了した部分の工事に先行して、昭和57年度より埋蔵文化財の調査を実施してきました。

本報告は、その成果についてとりまとめたものであります。本書が今後の遺跡への理解と湖南の歴史を考えるうえでの資料となれば幸いです。最後の調査にあたり御協力を賜った関係者の方々に深く感謝の意を表します。

昭和59年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化財保護課長

外地 忠 雄

例 言

1. 本書は、野洲郡野洲町に所在する。県道六条野洲線工事に伴う遺跡についての発掘調査報告書である。
2. 本調査は滋賀県土木部道路計画課（草津土木事務所道路計画課）の依頼にもとづき、滋賀県教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会の協力を得て実施した。
3. 現地調査および報告書作成には、滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師木戸雅寿が担当し指導した。
4. 現地調査、整理については、大橋信弥（文化財保護課技師）の協力を得たほか、落盛実、高山雅一、川端満、浅原明、石本象二、井上誠、大西勲、奥村一彦、西村久史、山元幸彦、稲石尚、北岡学、北島昭宏、小林義幸、辻峰子の諸君が参加した。
5. 整理・報告は、滋賀県教育委員会文化財保護課木戸雅寿が行ない辻峰子の協力を得た。

目 次

1. 調査に至る経過と調査の方法…………… 1
2. 位置と環境…………… 1

試掘調査概要

- B 地 区…………… 3
- C 地 区…………… 8

北東遺跡

- はじめに…………… 13
- 遺 構…………… 16
- 遺 物…………… 17
- 結 び…………… 18

図版目次

- 図版 1. (上) B地区 1 G
(下) " 2 G
- 図版 2. (上) B地区 3 G
(下) " 4 G
- 図版 3. (上) B地区 5 G
(下) " 6 G
- 図版 4. (上) B地区 7 G
(下) C地区 1 G
- 図版 5. (上) C地区 2 G
(下) " 3 G
- 図版 6. (上) C地区 4 G
(下) " 5 G
- 図版 7. (上) C地区 6 G
(下) " 7 G
- 図版 8. (上) 東側トレンチ全景
(下) 西側トレンチ全景
- 図版 9. (上) 東側トレンチ遺構全景
(下) 東側トレンチ遺構近景
- 図版 10. (上) S D-1 全景

(下) SD-2 全景

図版11. (上) 西側トレンチ第1面全景

(下) 西側トレンチ第2面全景

図版12. 出土遺物

図版13. 出土遺物実測図

図版14. 東側トレンチ平面図

図版15. トレンチ断面図

挿図目次

第1図	周辺遺跡位置図	2
第2図	遺跡より永原御殿を望む	2
第3図	B地区グリット層位図	4
第4図	B地区グリット設定図(西半)	6
第5図	B地区グリット設定図(東半)	7
第6図	C地区グリット層位図	9
第7図	C地区グリット層位図	11
第8図	C地区グリット設定図	12
第9図	旧群衆	14
第10図	トレンチ設定図	15

1. 調査に至る経過と調査の方法

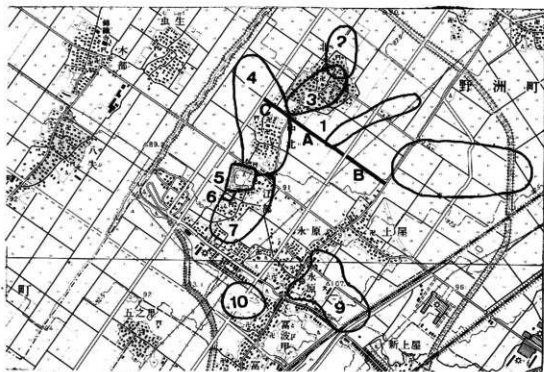
県土木部道路課によって計画されていた六条一野洲線道路改良工事は、その事業対象地内に何ヶ所かの埋蔵文化財包蔵地が知られていた。そこでその対応について県教育委員会は二度、原因者である道路課と調整会議に入った。計画によると野洲町内において、国道8号線より上屋を通り中北と北村の間を通る童子川に至る、道路部・排水溝・歩道を含む幅10mの道路が計画されており、道路部において深さ1m近くまで掘削を行うことにより、全線にわたる試掘調査を行なうことになった。そこで用地売却の完了している地点より順次試掘調査を行なうことにした。まず、中北より東、朝鮮人街道に至る区間（A区）の試掘を行なった。調査の結果、東端40mの間に於いて遺構が確認され昭和58年度中に調査（今回報告分）を行うことになった。次いで、上屋までの300m区間（B区）の試掘調査を行ない、中北在所以西200m区間（C区）の調査を行なった。

調査の方法は試掘調査においては約10～25mピッチを目標に3m～1m幅のグリットを設定し、現高面より鉄板をはかせたバックボウにより層位ごとに順次2m近く遺構面が検出されるまで掘り下げた。

発掘調査は、鉄板をはかせたバックボウにより造成盛土を除去したのち、層位ごとに順次遺構面まで掘り下げたのち調査に入り、遺構を実測、写真によって記録保存し遺物を捨得した。

2. 位置と環境

当遺跡は鈴鹿山系に源を発する野洲川によって運ばれた土砂によって形成された扇状地の右岸東部に立地し、北に童子川、東に東氈王川、西に西氈王川が流れた中の沖積平野上に存在している。付近には周知のとおり、北遺跡（弥生～奈良時代・集落跡）・中北遺跡（奈良～中世・集落跡）・上屋北東遺跡（散布地）等の古代～中世の集落跡の存在が確認されており、他にも白鳳の寺院跡である永原庵寺、歴史上著名な永原氏の拠点である永原御殿跡（館跡）、平家物語に出てくる氈王・氈女の屋敷跡がある。またこれらの遺跡の東側を南北にぬける交通網である朝鮮人街道が貫らぬいている。



- | | | | | |
|--------|--------|----------|----------|---------|
| 1 北東遺跡 | 3 北遺跡 | 5 永原御殿遺跡 | 7 江部遺跡 | 9 上永原遺跡 |
| 2 北北遺跡 | 4 中北遺跡 | 6 永原遺跡 | 8 上層北東遺跡 | 10 三堂遺跡 |

第1図 周辺遺跡位置図



第2図 遺跡より永原御殿を望む

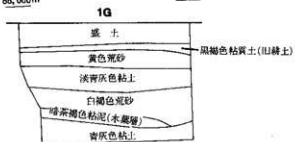
試掘調査概要

— B地区 —

B地区（朝鮮人街道～上屋までの200m）はグリットを7箇所設定した。結果は7Gに包含層と微量の遺物を確認したのみであった。以下に各々のグリットにおける簡単な層位の説明を述べていくこととする。

- 1 G. 深さ1 m90cmほど掘り下げた。層位は順次上より、盛土34cm、黒褐色粘土（旧耕土）10cm、黄色荒砂24cm、淡青灰色粘土38cm、白褐色荒砂30cm、暗茶褐色粘泥（木葉層）20cm、青灰色粘土を34cmほど掘り下げた所で湧水をみた。特に注目すべきことは、旧耕土以下荒砂・粘土・荒砂・粘泥と2回にわたる雨水汜濫による土砂流入の痕跡がみられ、埋没立木や木葉による層位も確認できている。以前は湿地帯であったことと思われる点である。遺物・遺構ともに検出されていない。
- 2 G. 深さ2 m14cmほど掘り下げた。層位は上より順に盛土58cm、黒褐色粘質土（旧耕土）25cm、暗灰褐色土36cm、白褐色荒砂40cm、暗茶褐色粘泥（木葉層）20cm、淡黄灰色粘土35cm、若干の色調の変化はあるが1Gと同じ様な層位である。遺物遺構ともに検出されていない。
- 3 G. 深さ2 m50cmほど掘り下げた。層位は順次上より盛土90cm、黒褐色粘質土（旧耕土）36cm、黒灰色土30cm、暗灰褐色土40cm、白褐色荒砂18cm、暗茶褐色粘泥（木葉層）10cm、淡青灰色粘土26cm、非常に湧水がはげしい。1G・2Gと同様の層序関係である。遺物・遺構ともに検出されていない。
- 4 G. 深さ2 m20cmほど掘り下げた。層位は順次上より盛土52cm、黒褐色粘質土（旧耕土）64cm、黒灰色土34cm、泥炭土34cm、白灰色荒砂36cm湧水がはげしい。1G・2G・3Gと層序関係的にみれば大差ないように思える。ただし木葉層のかわりに泥炭層が確認されている。遺物・遺構ともに検出されていない。
- 5 G. 同様に2 m近くまで掘り下げたが湧水がはげしくポンプでも追いつかない状況で、すぐに壁面がくずれ層位の検出が出来なかったので写真記録にとど

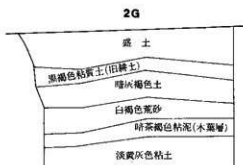
88,000m



4G

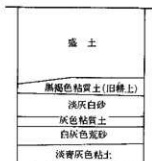


88,000m



88,000m

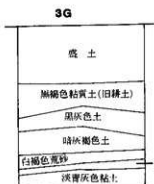
6G



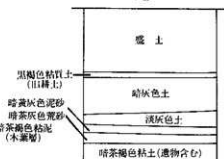
88,000m



88,000m



7G



第3図 B地区グリット層位置

めた。遺物・遺構ともに確認されていない。

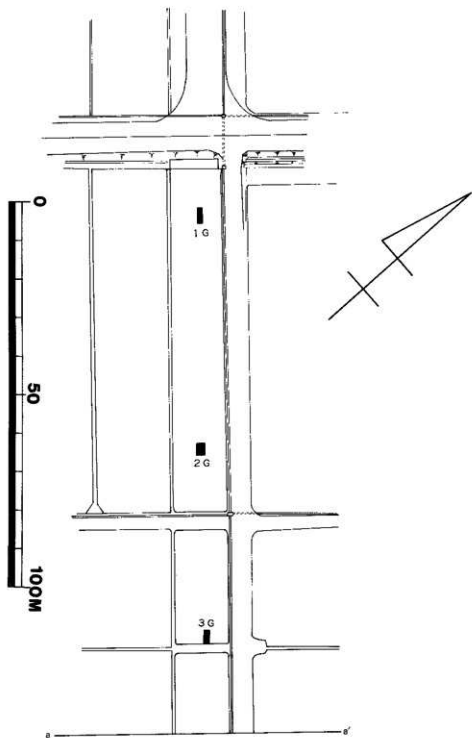
6 G. 深さ2 m 50 cmほど掘り下げた。層位は順次上より盛土1 m 20 cmと厚く、黒褐色粘質土(旧耕土)20 cmと続く、以下淡灰白砂36 cm、灰色粘質土14 cm、白灰色荒砂30 cm、淡青灰色土30 cm、1 G～5 Gまでとはほぼ同じ様な層序関係であるが、木葉層・泥炭層はみられなかった。遺物・遺構ともにみられなかった。

7 G. 深さ2 m 40 cmほど掘り下げた。層位は順次上より盛土1 m、黒褐色粘質土10 cm、暗灰色土58 cm、淡灰色土16 cm、暗黄灰色泥砂12 cm、暗茶灰色荒砂16 cm、と続き、遺物を含む暗茶褐色粘土を28 cmほど掘り下げた面で遺構らしき方形のコーナーをつかんだ。遺物は磨滅が著しい土師器が2片であった。時期は確定するに至らなかった。

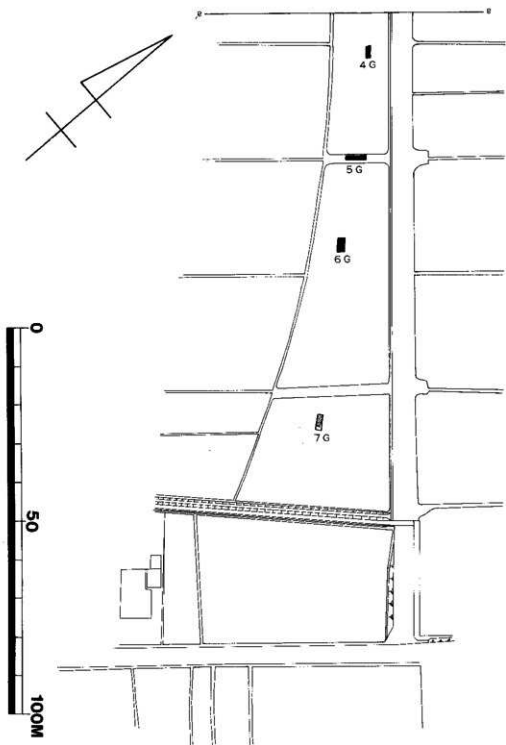
以上のようなB地区の試掘調査結果を最後に述べておく。

これら、B地区の試掘各所には周知の遺跡は認められてはいない。それを示すように1 G～6 Gまでの箇所においては、湿地を示す層位が確認できた。しかしながら7 Gにおいて包含層らしき層位と遺構らしきものが検出されている。このグリットのすぐ東北に周知の遺跡とされる上屋北東遺跡(散布地)があり、この遺跡の限界がもう少し西へ伸びてくる可能性を示しているものであると思える。

よって試掘調査の結果を示し、1 G～6 Gの間において埋蔵文化財がない旨を通告し、工事に着工してもよい旨を通告した。



第4図 B地区グリッド設定図(西半)



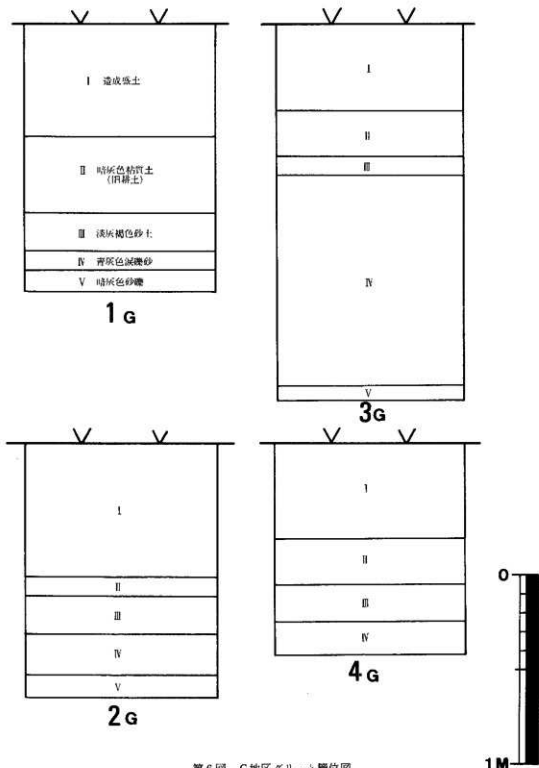
第5図 B地区グリッド設定図(東半)

— C地区 —

C地区（中北～童子川間）では200m間において調査グリット（G）を7箇所を設けて順次試験調査を行なった。1～6Gにおいては遺構・遺物ともに検出、確認されることはなかった。7Gにおいてのみ包含層らしき層位とともに磨滅した土器片を2点確認した。

以下順を追って各グリットの説明を簡単に加えておく。

- 1 G. 現行面より1 m40cmまで掘り下げた。上より約60cmの盛土を除去した後、40cmの厚さで旧耕土と思われる暗灰色粘質土（Ⅱ層）がみられ、続いて淡灰褐色砂土（Ⅲ層）が20cm堆積、青灰色混礫砂（Ⅳ層）が10cm堆積のち暗灰色砂礫層（Ⅴ層）に達し湧水をみた。Ⅴ層上面で埋没木らしきものが確認された。
- 2 G. 現行面より1 m40cmまで掘り下げた。上よりⅠ層（盛土）78cm、Ⅱ層（暗灰色粘質土）10cm、Ⅲ層（淡灰褐色砂土）20cm、Ⅳ層（青灰色混礫砂）20cm、Ⅴ層（暗灰色砂礫）に達し湧水をみた。遺物・遺構ともに検出されていない。
- 3 G. 現行面より2 mまで掘り下げた。上よりⅠ層（盛土）46cm、Ⅱ層（暗灰褐色砂土）10cm、Ⅳ層（青灰色混礫砂）110cm、Ⅴ層（暗灰色砂礫）に達し湧水をみた。Ⅳ層のみがやや厚く堆積しているが大筋に変化はなく、遺物・遺構ともに検出されていない。
- 4 G. 現行面より1 mまで掘り下げた時点で湧水がはげしく、壁面がくずれた。層位は上よりⅠ層（盛土）50cm、Ⅱ層（暗灰色粘質土）24cm、Ⅲ層（淡灰褐色砂土）20cm、Ⅳ層（青灰色混礫砂）、であった。遺物・遺構ともに検出されていない。
- 5 G. 現行面より1 m40cm掘り下げた。層位は上よりⅠ層（盛土）45cm、Ⅱ層（暗灰色粘質土）8cmと薄く続き、Ⅲ層（淡灰褐色砂土）12cm、Ⅳ層（青灰色混礫砂）26cm、Ⅴ層（暗灰色砂礫）35cmほど掘り下げたのち湧水をみた。層序ともに変化はなく、また遺物・遺構ともに検出されなかった。
- 6 G. 現行面より1 m88cm掘り下げた。層位は上より、厚くⅠ層（盛土）70cm、続きⅡ層（暗灰褐色粘質土）30cm、Ⅲ層（淡灰褐色粘土）20cm、Ⅳ層（青灰



第6図 C地区グリッド層位図

色泥礫砂) 30cmでV層(暗灰色砂礫)に至り30cmほど掘り下げたところで湧水をみた。層序には変化はないが全体にレベルが下がっていく。同じく遺物・遺構ともに検出されなかった。

7G、現行面より2mほど掘り下げた。層位は上よりI層(盛土)30cm、II層(暗灰色粘質土)38cm、III層(淡灰褐色砂土)30cmと堆積しているところは1～6Gまでと変わりはないが、以下はVI層(褐色粘土)40cm、VII層(淡黄褐色粘土)に至る。このVII層は我々がよく地上と呼ぶ、よく生活面が形成される土壌である。このVII層が58cmほど続きVIII層(青白色粘土)に至る。遺物・遺構とともに検出されなかったが、これより以西に於いてVIII層上面で遺跡が存在する確率は非常に高いといえる。

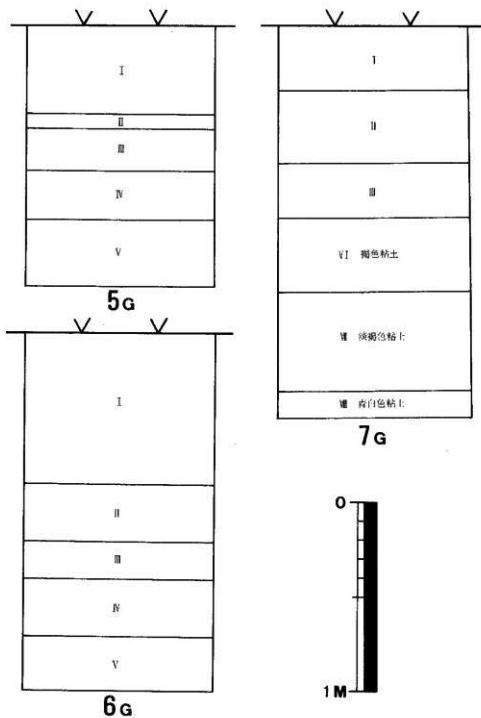
最後に試掘の概要を述べると次のようになる。

1G～6Gまでの間はI層(造成盛土)、II層(旧耕土)の直下よりIII層の砂または砂礫土が続き、この付近一帯に古代の野洲川の支流かと思われる旧河道が走っていることが確認できた。しかし、試掘抗に限られている為に、その方向や規模は明らかにすることはできなかった。

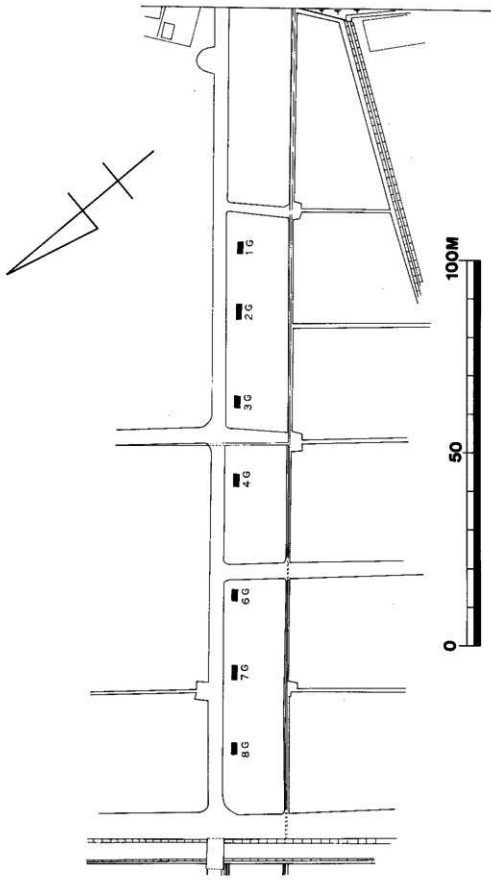
7Gにおいて、1G～6Gまで検出できた旧河道は姿をみせず、変って良好な粘土が検出できており、以東において遺跡の存在する可能性があることは述べた通りである。

これら、C地区の試掘各所は周知の中北遺跡のほぼ南東からその中心に向かう部分であり、遺構検出の可能性を期待できるところであったが、以上のようにどのグリットにおいても遺構・遺物は検出されていない。しかしながら7Gの結果が立地条件において、その遺跡が存在する可能性を示した。

以上のようなことからC地区においては7Gを含めてそれ以東、童子川までの間を改めて調査する必要があることを調査の結果として打診した。



第7図 C地区グリット層位図



第8図 C地区グリッド設定図

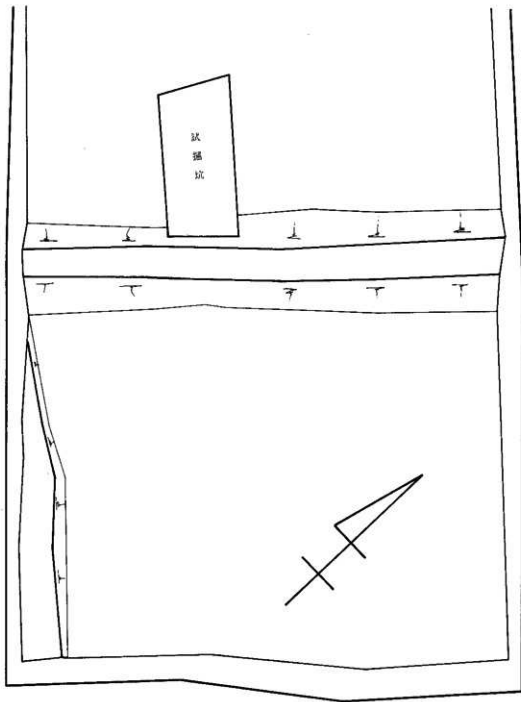
北東遺跡

はじめに

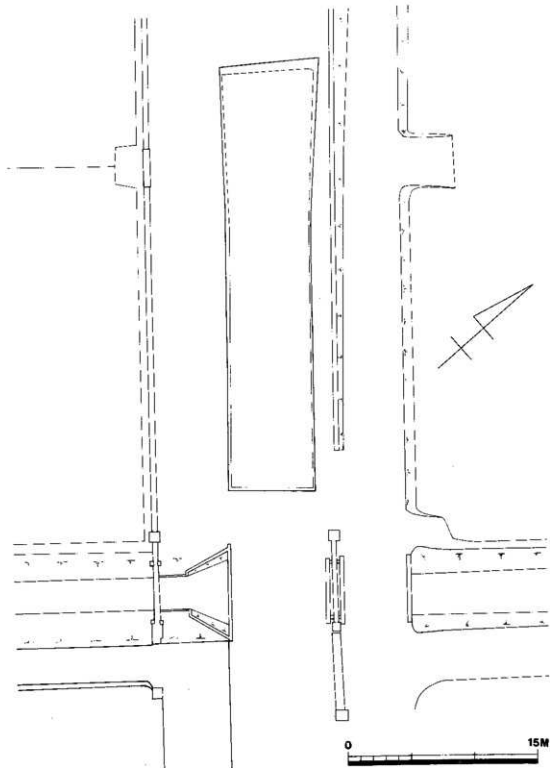
昭和58年度5月より行なった北東遺跡は、前年度県道六条一野洲線に伴なって試掘調査が実施されたA地区の一部であり試掘調査の結果、埋蔵文化財が確認され調査の必要があり、県土木部道路課と協議ののち、発掘調査を行なうこととなった。

調査は道路敷部分、幅10cm、長さ38cmの範囲をその対象とした。しかしながら、調査対象地以外に排土置場がないため東側と西側、2回にわけて調査を実施することにした。また、工事は貫入工法をとるため、いわゆる地上と呼べる土壌まで掘り下げた。作業工程は、はじめに東側よりツメに鉄板をはかせたバックホーにより、道路工事によって先に盛られた造成土を除去することから行なった。造成によって盛り上げられた土砂を約60cmほど取り除くと旧耕土が表われた。この時点でトレンチの一部に（第9図参照）東西と南北にほぼ十字に交わるおそらくは、ほ場整備以前のものと思われる旧畦畔を検出した。これを平板実測したのち順次、旧床土、旧畦畔とを掘り下げていった。そして現行面より約80cmほど下げた面で遺物を含む層（暗茶褐色泥砂）に達した。この面できれいなく遺構検出を行なったが遺構が検出されなかったため、包含層を除去することにした、この包含層は部分によって若干、色・質をかえるが、全体に約10cm～20cmほど堆積していた。包含層を除去すると黄色の粘土に達した、この黄色粘土の上面で遺構検出を行ない遺構の存在を確認した。

遺構は遺構検出状況での写真記録をまず行ない、平板実測ののち、全ての遺構を掘り切り、実測により図面化し、全て写真による記録を行ない、東半部の調査を終了した。同じような方法で西半部の調査も実施したが、西半部では東半部のような遺構は確認されなかった。そうした全調査を8月31日に終了し、工事に明け渡した。



第9圖 旧駐所



第10図 レンチ設定図

遺 構

柱穴群

柱穴は全部で45箇ほど検出できた。全体に30cm前後と比較的浅く、径も30cm～50cmと小さなものが多かった。面横的な問題があつてか、まとまりをなしてひとつの掘立柱建物をなすものはみつげだすことはできなかった。

土 堀

土堀は全部で10箇ほど検出できた。特にトレンチ東端とSD-1によって切られている不整形で底も凹凸のはげしい深い土堀は、野洲町の遺跡にはよくみられる粘土りの穴ではないかとの教示を受けた。(野洲町古川氏)

以下に遺物との関連のある土堀のみに説明を加えておく。

SK-1 1m10cm×1m30cmのほぼ長方形のプランを持ち、深さ60cmほどの穴である。埋土は黒褐色の泥砂が詰まっていた。

SK-2 浅く、小さな土堀のひとつである。

SK-3 浅い、長径2mほどの長円形を程する土堀で、土師器や須恵器・灰釉陶器・瓦等が出土している。

SK-4 一辺80cmの方形の土堀である。深さは約50cmほどあつた、底は一部段のようになっているところがあり、やや袋状を程する。

溝

溝は2条、トレンチを南北に横切るものが検出できた。

SD-1 幅狭い所で70cm、広い所で80cm、の深さ約30cmの溝で黒褐色の泥砂のような土で埋まっていない所から〔R-1〕を石製品として採取した。他に瓦も出土している。

SD-2 幅1m40cm～2m50cm、深さ約20cmの浅い層である。埋土は淡白灰色荒砂であつた。

遺 物

今回調査した北東遺跡より出土した遺物は、ごく限られている。図化したもの(図版12)も含めて遺物を遺構ごとに説明を加える。

SK-1 出土遺物

SK-1では図化できるものはなかったが、須恵器(坏蓋片)3点、土師器(甕)1点、他土師器片10数点が出土した。時期決定のできるようなものはなかった。

SK-3 出土遺物

SK-3では須恵器(坏片)5点、(甕片)1点、瓦片3点、灰釉陶器2点、他土師器片40数点、黄瀬戸〔T-1〕1点が出土した。

SK-4 出土遺物

SK-4では須恵器〔S-1〕が1点が出土した。静止糸切底の坏である。

P-3 出土遺物

P-3では須恵器(坏蓋片)1点が出土した。

SD-1 出土遺物

SD-1では須恵器片2点、土師器(皿片)1点、瓦片〔SK-1〕1点、石製品〔R-1〕1点が出土した。特に〔R-1〕は形状矢印型を程し、断面角柱状に全体をなめらかに磨製している石製品であり、SD-1内ではこれ以外に石礫はみいだされていないことから何らかの遺物であろう。

包含層出土遺物

以上の他に包含層で多くの遺物が出土している。図化できた遺物の説明を加えておく、須恵器、坏、坏蓋〔S-2、3、4、5〕、陶色TK-7あたりの年代(8C代)を示す須恵器である。灰陶〔KT-1〕1点、土鐘〔P-1〕1点、鉄釘〔I-1〕1点、瓦片〔KA-2、3、4〕、その他瓦片9点が出土している。いずれも表縄目、裏布目の薄手で小型の瓦である。

以上の様に今回出土した遺物は、8世紀を中心にそれ以降の年代を示すものである。おそらく縄目・布目の小型の瓦も飛鳥時代の瓦である可能性もある。

むすび

最後に若干の今回調査した結果をもとに北東遺跡にふれてむすびとしたい。

周知の遺跡北東遺跡は台帳上散布地となっており、その性格は明確ではなかった。今回の調査ではその北東遺跡の散布範囲の西端をかすめる位置が調査対象地となっており、そういう意味で北東遺跡の調査が注目されるところであった。

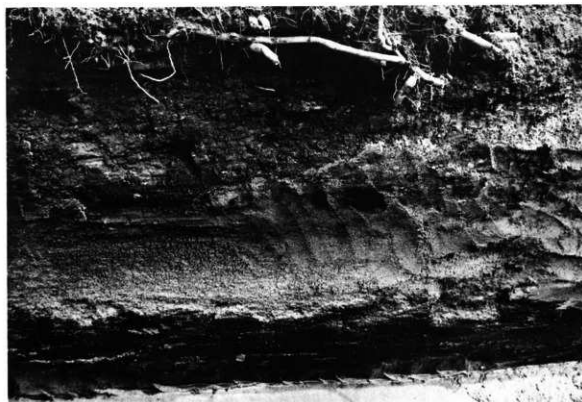
調査を実施してみると、上部での遺物範囲を明確に示すようにトレンチの東半部分において多数の遺構が検出できた。遺物自体は出土量が多くなく、遺構自身の時期決定はむずかしいが、出土遺物中の糸切底の須恵器や陶器より判断して、平安時代中にその年代をおくことができると思う。

さらに今回の調査で注目しなくてはならないことは、包含層中に出土している8世紀代の須恵器と縄目・布目の薄手で小型の瓦群である。周囲には、ここより700m離れた地点に永原廃寺（白鳳）の寺院跡が周知されているが、瓦自身寺院にのる様な瓦でなく、時期も若干ずれる。また距離的にみても離れすぎていること等を考え合せても、これらの遺物が永原廃寺のものであるという可能性は薄く、これらの遺物を含む包含層が流れ込み状堆積をしていること、遺構と時期が逆転していること、遺物の磨滅度からみても、近効にこの様な瓦がのった建物群が存在している可能性があるといえる。

图 版



1 B地区 1G



2 B地区 2G



1 B地区 3G



2 B地区 4G



1 B地区 5G



2 B地区 6G



1 B地区 7G



2 C地区 1G



1 C地区 2G



2 C地区 3G



1 C地区 4G



2 C地区 5G



1 C地区 6G



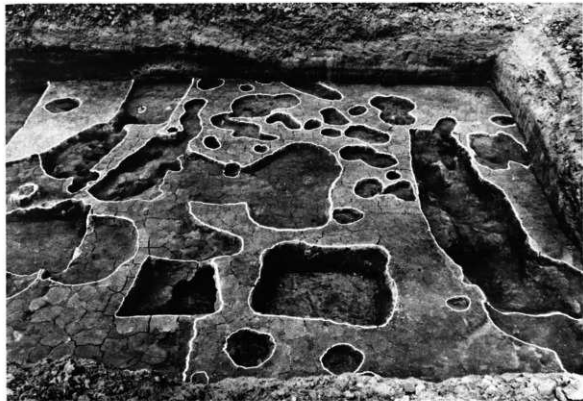
2 C地区 7G



1 東側トレンチ全景



2 西側トレンチ全景



1 東側トレンチ遺構全景



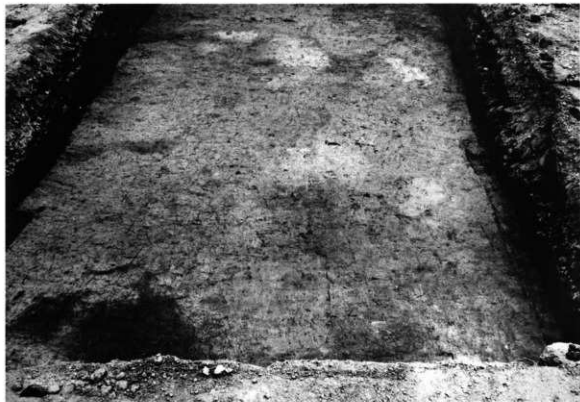
2 東側トレンチ遺構近景



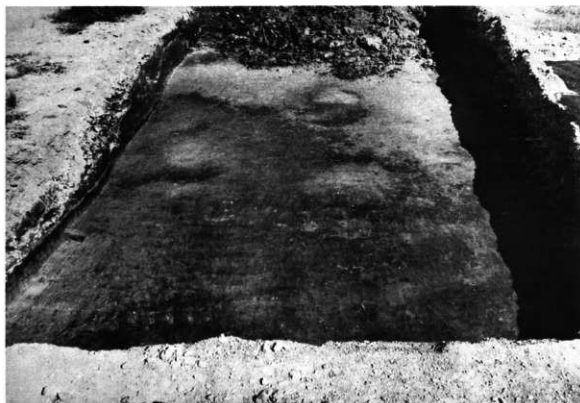
1 SD-1 全景



2 SD-2 全景



1 西側トレンチ第1面全景



2 西側トレンチ第2面全景



S-2



S-1



T-1



S-3



S-5



KT-1



S-4



KA-1



D-1



R-1



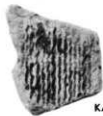
I-1



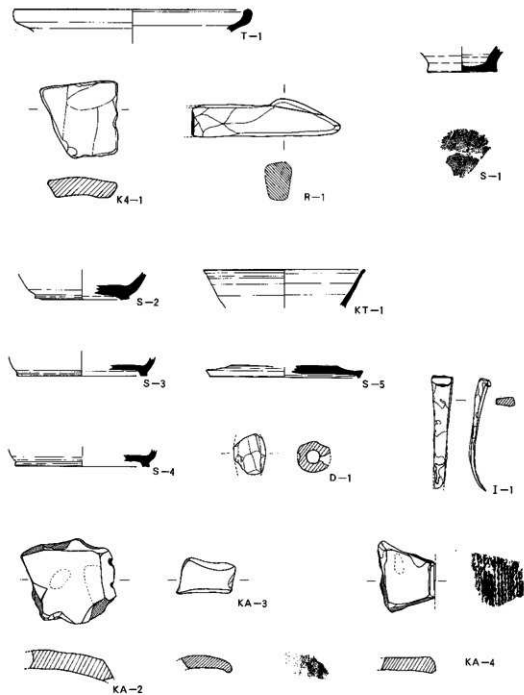
KA-2



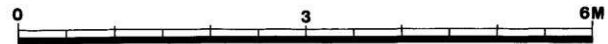
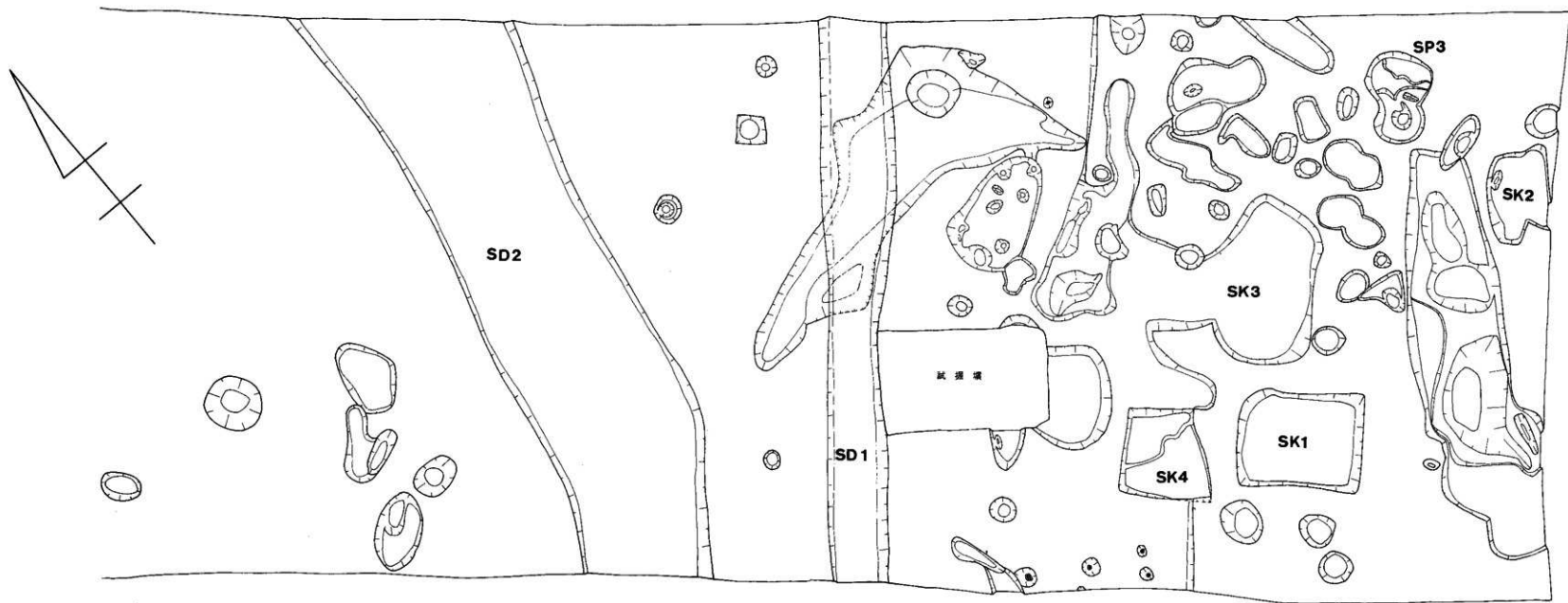
KA-3



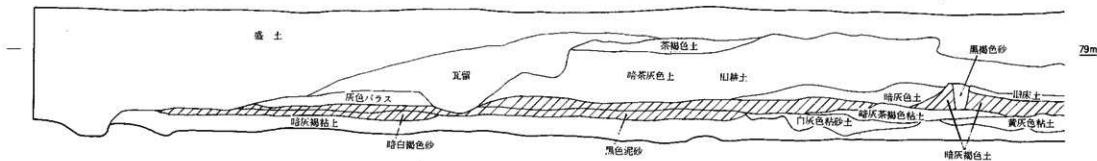
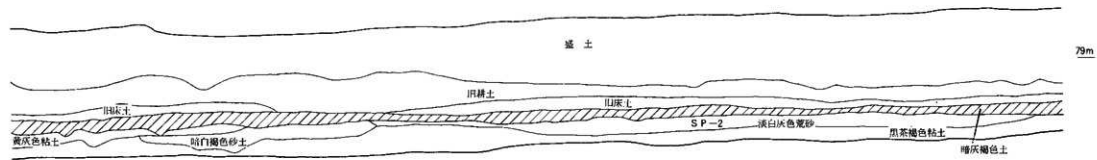
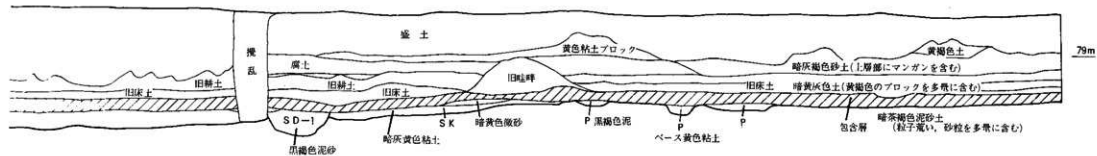
KA-4



SK-3(T-1), SK-4(S-1), SD-1(KA-1, R-1)
 包舍壁(S-2.3.4.5, KT-1, D-1, I-1, KA-2.3.4)



東側トレンチ平面図



トレンチ断面図

県道六条一野州線工事に伴う
関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ
——北東遺跡——

昭和58年3月

編集 滋賀県教育委員会
滋賀県教育委員会
発行 (財)滋賀県文化財保護協会
印刷 有限会社 真陽社
